

14、庁舎屋上の有線放送室は、今は合理化されて無人作動となっているが、テープに番組は収められ、各家のテレフォン
IIスピーカーに通じて自由に番組が聞かれる仕組みである。また放送室には夥ただしい記念のカップ、楯が誇るべき歴史
を語っている。

15、平和中学校の池上正幸教諭の書くことによって生活を考える綴方指導、同西小学校長井上弥太郎氏の学習指導―学力
調査活用による―の研究等もある。また同校の綴方教育も評価されている。

結 語

―書き終えて―

恵まれた自然の条件―豊かな日光と水と広い低地―のなかに、われわれの先祖が住みついてから何千年を経た
ことであろう。秋山山根にいねの栽培が始まってからでも二千三百年である。その間に人びとの生活はたしかに
豊かに幸福になった。痘瘡の熱で暑苦しくても地面に寝てはならないと注意された人びとは、応接室の快適な安
楽椅子で、シャンデリアのもと読書、団欒を楽しむことができるようになった。思えば長い苦しい歴史ではあっ
たが、その間の進歩もすばらしいといえる。こうした進歩を支えたものは何か、もちろん天恵の条件のなかで
人びとの努力である。人びとは神を敬い家族を愛し隣人と親しみ、時間を惜しんで働いた。働きに働いたことは
ほとんど働き過ぎるほどであった。これは今も続いている。

こうして働いてえた富は、しかしながら長い歴史の間に、しばしば貢納―税として上に吸い上げられた。ある
時は集落の族長に、そしてまたある時は国司や郡司、里長に、そして武士の世となれば地頭や領主たちに、近代
でも富国強兵のために政府にであった。年貢さえ納めるなれば、百姓ほど気楽なものはないと教えられ信じさせ
られてであった。

語

もちろん下から吸い上げるだけが、上の者のやったことと思っただけであらう。古代には「セイ本」を
造り、中世には「ヒ」を造って、その時代なりに生産への指導を忘れてはいない。ことに今から約三百年前の野
中兼山の弘岡井筋の建設は、春野地方にまったく新たな条件を創出したものであった。畑地は水田となり、水田

結

二毛作は支配的となり、豊かな未来が約束されたものである。もちろんその為には多くの労力を提供させられたが、これは子孫に豊かな遺産となったものである。

さて人間は個人や家族だけの協力では弱い。隣人が村ごとに団結し、さらに地域の枠を拡げてゆくことは、春野町のように仁淀川の怖ろしい水害を防ぐためにも、また弘岡井筋のような水利を守るためにも必要である。すでに中世武士の世から村々の団結は進められ、とくに村方に名主が生まれてくるとこの団結は強められ、これが長宗我部氏を支持した一領具足となり、さらに山内藩政期には郷士あるいは庄屋として村方の中心となる。時には強く村のために立ち上って、藩に対して言うべきは言うという姿勢を持ったが、時代は身分制として団結を妨げる差別の世であった。したがって村の団結は、やはり明治維新をまたねばならなかった。

御一新によって身分制は廃止され、地主として自信を持った人びとは上に對抗するようになる。用水と堤防による団結がこれを支えて、吾南地方に政治家は出現し、さながらに民権自由の中心の観を呈したが、これらの人びとの多くは地主層であったために、その活動の華やかさに比べて、農村の人びとの生活が豊かになるということとは少なかった。この時基盤を拡げて、真に働く農民の為めと立ち上ったのが自作農層の人たちで、大正の不況のなかでの産業組合運動はその象徴であり、弘岡水平社の結成や、小作農も参加した土佐―高知県のデンマークはさらにその象徴である。ここに人びとは自分たちの進むべき道をはじめて自らの手で握ったのであった。この時若い人びとの間に真の農村文化も生まれかけたが、昭和の大恐慌から戦争への道のなかで、すべては押し流されていった。

明治初年から戦争終結までのなかで、もう一つ人びとのたしかに握ったのは、近世末期以来生まれた教育の重要性であった。人びとは苦しいなかで子弟の教育のための費用は惜しまなかった。ことに力を合せて弘岡高等小

学校を育てあげたことは、堤防と井筋を守り通したことに對比されよう。また一部ではあったが地主層の子弟には速く遊学するものもあり、日本近代文化の担い手になる。村に残って村を興すもの、都市に出て国の全体に係するもの、ともに近代日本の支えであった。

戦争は終わった。長い苦心の成果は、破れた国土とともに雲散霧消したかに思われたが、戦後三十年以前にも増した繁栄となった。何故であろうか。勤勉な人びとが荒廃した国土を再生させたからである。よき教育を受けた、勤勉な人びとの団結に勝るものがあるとは思われない。またその団結であるが、終戦を境にして大転換が行なわれた。新憲法の示す主権在民であり、とくにこの場合重要なのは、新地方自治制による昭和二十二年（一九四七）以来の地方首長―市町村長―の公選制であった。従来しばしば国、県の命令の伝達執行に傾いた地方自治体は、真に自治体らしく地方住民の福祉向上のために、場合によっては国、県に対してその優位を主張するとともに、息子にさえ捨てられた孤独の人の頼りともなる。

こうした風潮のなかで、兼山以来の弘岡井筋と仁淀川堤防に対する共通の関心を基盤に、ついに関係する吾南各村を春野村一町として大同団結させる。まさに近世以来の伝統が、新時代に対応して飛躍したものであって、この日昭和三十一年（一九五六）九月三十日は永く記念すべきものである。合併とともに、急速に公共施設は整備され、弘岡上より森山をへて仁西に及ぶ連続長堤は完成、また弘岡井筋の近代的コンクリート化も完工、さらにはほとんど集落のなかったところに、忽然として白堊の庁舎は生まれる。これに最近竣工した春野中学校を加えた四つの施設は、合併を出発点とする町の豊かな未来を語るものである。

語
結
思えば長い苦しい時代の後ようやく訪れた栄光であるが、なおここで過去を回想するとともに、未来に向かつて問題を考えることも無駄ではあるまい。もともと村の団結は農業とともに生まれた。水利は「セイ本」、

「ヒ」の昔から村民を結ぶ絆であった。これを元にして吾南九カ村の長い歴史は生まれる。しかも一挙に春野として広域の自治体となる。弘岡井筋と仁淀川堤防の伝統があるとしても、なお真の共同体意識の確立には若干の時間を要するだろう。ことに井筋、堤防の近代化は国、県の力の導入によって成功し、これによって人びとの負担は大きく軽減されたが、反面これらの力に頼って人びとを公共のことから無関心にし、ひいては団結への熱意を失わせる結果となりはしないか、井奉行、土功会、水防組合、水利組合の歴史は、なお生きているものとして想起したいものである。

また土佐―高知県のデンマークが、超人的な勤勉によってなお生きているとしても、その経営は大正時代と大きく変貌した。アメリカ式商業的農業は多くの収入を約束し、さらに兼業農家も日本資本主義発達により、都市に職をえてその収入は確保される。しかしながらそうした生活は、日本および世界の情勢の動きと密接に関係して動揺する。先年の石油ショックを思えばこの困難な時世は明らかである。年貢さえ納めていれば気楽なものといわれた時代とも、また検見による小作料の減免が最大の関心事であった時とも大きく異なってきた。多くの人びとに、主権者―独立の経営者としての誇りと責任感、そして優れた力量が求められる時代となった。またこうした経済成長のなかで、かつての地主小作関係とはまた別の階層が人びとのなかに生まれ、これが人びとの共通の利害成立を妨げることにもなる。

たしかに所得は増加し生活は向上した。まったく想像を絶したといえるのであろう。しかしながら個人的にも、後継者難、長時間労働、農薬の害等問題が多い上、国家、社会的には食糧と環境とを守る農業の役割がある。これらはいわゆる農政として日本の将来にかかわる問題でもある。もとより個人や自治体の力を超える場合も多いことと思われるが、つねにわれわれは主体的―根元的にこうした問題に対処していかなばならない。改め

て「人間はその努力の目的をつかんでいかなければならない」「豊かな社会」ガルブレイズ ことである。何のために働くか、人生の目的は何であるか。ここに至れば教育である。近世末以来春野町の先人たちが努力を重ねた教育こそは、この究極に向って人びとを導くことであらう。

「古えを借りて今を影す」 「汗血千里之駒」

坂崎紫瀾